

全町公園の町づくりをはじめ、住民の積極的なまちづくりへの参加を推進している西目町。行政サイドの策定する堅実性の強い総合発展計画とは別に、住民の自由な発想を取り入れようと協議会を設置し、「活性化計画」を取りまとめました。

採算度外視のユニークなアイデアを満載（西目町）

行政主導による

従来型の活性化策

掲げた「新総合発展計画」を平成8年に策定、向つ10カ年の中長期まちづくりビジョンに取り組んでいます。

西側は遠浅の砂浜が続く海岸線に隣接し、鳥海山の頂へと東南の方角に向かってせり上がる地形の西目町。面積自体は県内でも小さい順で7番目と小柄な割に、海と山の両方の自然に恵まれた地形を持っています。町ではこうした特性を生かし、自然環境に対する住民意識の高揚とともに保全・整備に取り組み、「全町公園の町」を目指すなど、住民とともに推進する4つの重点目標を

各地区の代表を集め

策定委員会を設置

そこで同町では、この総合発展計画とは別に、起爆剤としてのまちづくりプランを模索するため、平成12年、学識経験者と住民代表による「西目町ふるさと活性化計画策定協議会」を発足させます。「定住人口増加」「産業振興」「教育文化向上」等の活性化目標

「ふるさと活性化計画」表紙(左)と内容(上) 住民の視点から出たアイデアは今後のまちづくりの手がかりに。





協議会の様子。それぞれのテーマ毎に、様々な意見が湧き出ます。(写真提供：西目町)

達成のための計画を策定すべく、県立大学建築環境シSTEM学科教授の安原盛彦氏を会長に、町内各地区から男女11名が協議会員として委嘱を受け参画。会員の年代は20代、60代と幅広く、職業もそれぞれ違つたため、多様な観点から計画策定を協議することとなりました。

町の財政事情に

とらわれない斬新さ

5月から月1回のペースで行われた協議では、少子・高齢化・定住化、農林漁業・商工業、観光、環境保護、教育等の16項目について検討が行われ、その中から生まれた特に重要と思われる8事項を絞り込み、「重点プロジェクト」として取りまとめました。

この8つの案は、町職員ではない一般住民が考えただけあって、町の財政事情や個人等の利害、事業の規模・期間等を半ば度外視して構成されています。例えば、「町中央部の平坦で広大な田圃に楕円のマラソン周回コースを作り、健康増進の他芸能・文化活動に利用する」「町を貫流する西目川の護岸を自然の形に戻

して再生し、中州を作つて親水・環境学習・イベント活用する」「地形を生かし町全体を農林漁業者養成や山村留学・福祉実習等の学びの里とする」「平地・山・海の町内産食材だけを使った食材の日を設定し地産地消を促す」など、ユニークなアイデアが満載されています。

しかしながら、熟読するにつれ、それらは多分に実現の可能性を秘めており、また、町の活性化に貢献するであろうことが想像できます。

究極の目的は

役場職員の意識改革

この町民の夢を掲載した冊子は平成14年3月に完成しました。全86ページで、第1部に前述の重点プロジェクト、第2部に計16回の協議記録が掲載されています。発行部数は200冊、配布先は各世帯ではなく、意外にも町職員及び町議員でした。もともとこの冊子の製作目的は、主導的立場である町職員のこれまでの固定概念を一新し、啓発を促すための「意識改革」にあったのです。

担当する町企画課では、

「現在調査中の風力発電構想など、実現性を帯びているものもありますが、職員が思いもつかなかつた案も多くありました。21世紀のまちづくりの叩き台として貴重な意見です」と評価しています。

同書の巻末に掲載された資料編の「ふるさと活性化計画策定事業」スケジュールには、「平成14年4月～実践」とあります。協議会のアイデアを今度は行政が検討する番です。具現化されていく計画は、住民本位の取り組みとして今後も話題となりそうです。



昨年10月に新装オープンした明るい雰囲気役場庁舎。ホール中央には指針「小さな町の大きな挑戦」の象徴となる、町憲章・町歌等が刻まれた極小のモニュメントがあります(写真右)

